

長生管内稲作農家 各位

長生稲作情報 第5報

(令和8年7月24日発行)

長生農業事務所 改良普及課
担当：黒住、高内、河田

電話 0475-22-1771

◎長生地域の生育状況

6月7日の梅雨入り後は、気温は低く、降水量は多く、また日照時間は少なく推移したことから、幼穂形成期から出穂期までの日数が長くなりました。そのため、昨年と比較して、7月23日時点における水稻生育予測システム「でるた™」(茂原アメダス)による成熟期の予想は、3～5日程度遅くなっています。

◎今後の生育管理について

7月20日の梅雨明け後、気温が高い日が続いており、出穂期から成熟期までの期間は平年と比べて3～5日程度早まる可能性があります。また、葉色が低下しているほ場や水が不足しているほ場は、さらに成熟期が早まる可能性があります。品種、ほ場ごとに状況を確認し、刈り遅れに注意してください。

出穂期後20日間の日平均気温が26℃を超えると、基部未熟粒や背白粒などの白未熟粒が多くなる高温登熟障害の発生が懸念されます。品質や収量低下を防ぐためには、水管理が重要です。一般的に出穂期25日後までは田面の湿潤を保つため間断かんがいを実施します。今年は梅雨の影響により、中干しが十分に出来ず、地耐力が不十分なほ場が見られるため、田面の状態をよく確認しましょう。地耐力が十分確保出来ているほ場では、出穂期25日以降も、間断かんがいを継続しましょう。

病害については、梅雨の影響により、葉いもち病が多発生しているほ場が散見されます。また、これから高温が予想されており、紋枯病の発生にも注意が必要です。必要に応じて、治療効果のある薬剤で追加防除を行いましょう。使用時期が収穫前7～14日の薬剤が多いので、早めに対処しましょう。

斑点米カメムシ類については、梅雨の影響により、昨年より発生量が少ない傾向にあります。しかし、梅雨明け後、気温が急激に上昇し、晴天が続いており、これから斑点米カメムシ類の発生量が増加することが予想されます。ほ場をよく確認し、必要に応じて「出穂期から15日後頃」を目安に追加防除の実施を検討しましょう。

【アメダス茂原の気象データ】

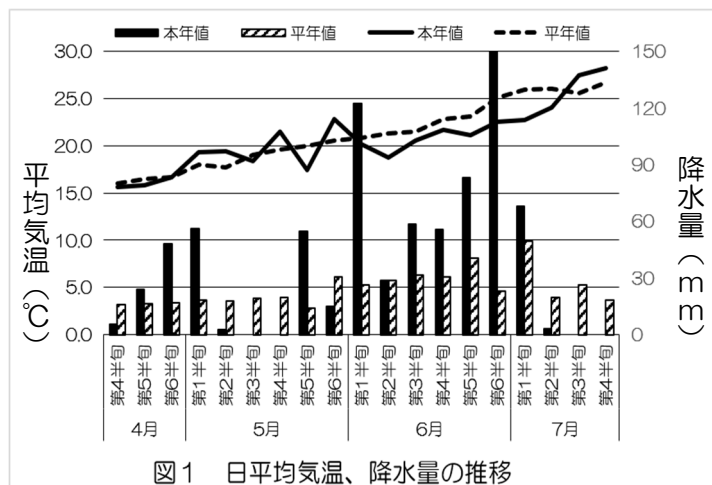


図1 日平均気温、降水量の推移

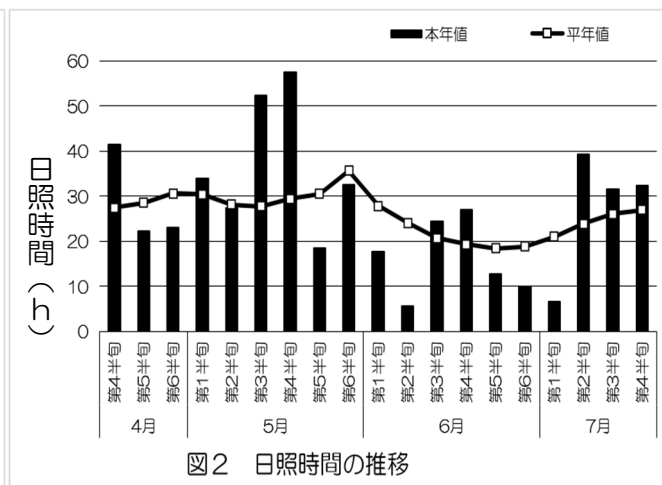


図2 日照時間の推移

※気温、降水量の平年値は過去10年間、日照時間の平年値は1991年から2020年の30年間。

◎長生地域の成熟期の予測について

長生地域の成熟期（帯緑色籾歩合（少しでも緑色の部分がある籾の割合）が約15%になるタイミング）の予測は表1のとおりです。

なお、本予測は今後の天候状況等により誤差が生じる可能性があるため、あくまで目安としてください。

表1 長生地域の成熟期の予測（7月24日時点）

	品種	移植日					出穂期から 成熟期の目安
		4月15日	4月20日	4月25日	5月1日	5月5日	
成熟期予測	ふさおとめ	8月9日	8月11日	8月13日	8月16日	8月19日	33日前後
	ふさこがね	8月14日	8月16日	8月19日	8月21日	8月24日	37日前後
	コシヒカリ	8月22日	8月24日	8月27日	8月30日	9月2日	38日前後
	粒すけ	8月20日	8月23日	8月26日	8月29日	9月1日	38日前後

※水稻生育予測システム「でるたTM」（茂原アメダス）による推定値。

◎収穫後の耕耘を！！

収穫後の秋耕は①雑草の防除②ジャンボタニシの防除③刈り株等の分解による土づくり促進④斑点米カメムシや有害鳥獣の密度低下など多くのメリットがあります。秋耕をして、来作の米作りをスタートしましょう。

（１）除草剤の散布

多年草雑草のオモダカ等が発生したほ場では、刈取り後のイネが再生した頃にラウンドアップマックスロードやタッチダウン IQ などの茎葉処理剤を散布して根まで枯らします。約2週間後、雑草が枯れた頃に耕うんします。

（２）耕うんの実施

秋の気温が高いうちに耕うんすることで、有機物の腐熟促進、多年生雑草・ジャンボタニシの防除につながります。また、二番穂は斑点米カメムシ類や有害鳥獣のエサとなり、増殖を促すことになるので、春までに複数回の耕うんを行いましょう。

【有機物の腐熟促進】

稲わらや雑草等の残さは土壌にすき込むことで、微生物により分解されます。稲わら、もみがらに加え、家畜ふん堆肥など有機質を投入し、よく耕うんすることにより、水田土壌の地力が向上します。冬季耕うんは、微生物による残渣の分解が進まず、田植え後に有毒なガスが発生して、イネの根を傷めるなどの障害が発生します。腐熟促進のために、遅くとも10月下旬頃までに耕起し、耕深は5～10cmの浅耕にしましょう。

【ジャンボタニシ対策】

ロータリー耕により貝を破碎して密度を減らします。また、1～2月に耕うんして地表に出し、寒気にさらすことで殺貝効果があります。なるべく土が乾いた状態の時にロータリー回転数を上げ（目安はPTO2速）、時速1.4km以下で耕うんします。